せんだい寸景

NO14　2005年3月
発行：じっかい電脳事務局

春 別盃不尽　奥州街道河原町

江戸日本橋を発した奥州街道は六十九次九十三里を経て仙台城下に入る。河原町はその入り口になる。ここに「丁切根ちょうぎんね」と呼ばれる木戸が置かれた。木戸脇の針生屋はこんにゃくの粉と鳥もちの専売権を許された商家で代々、木戸の鍵を預かる木戸番の家であった。針生正男はこの家の本家筋の生まれらしい。

かれがこの世を去って八度目の春が巡ってくる。小川肇には切ない季節である。ひとの交わりは時代とともに希薄になったのではあるまいか。若き日に夜を徹して語り、飲んだ友もいつか離れ声を聞くこともない。それが世間というものさーか。だが針生と小川の付き合いは45年の風雪に耐え途絶えることはなかった。一高軟式庭球部での出会いにはじまり、針生は日大芸術学部を経て映画音楽家の道を歩み、小川は京都・同志社大に進み演劇界への夢を膨らませたがやがて家業を継ぐべく仙台に帰るのだがふたりは酒を交わしては、夢を語りあい励ましあうー繰り返すが半世紀にならんとする交友である。

いまも変わらぬ姿の仙台駄菓子の店・石橋屋（舟丁）

広瀬川東畔旧五軒茶屋あたり（桜並木がある）

広瀬橋

河原町の木戸を潜ると奥州街道は南材木町・穀町・南鍛冶町・荒町・田町・染師町・北目町・柳町・南町と北上するのだがこの間カギ型に折れる城下独特の道路が現在もその姿を留めている。仙台藩は南面を防御の要とみなし芭蕉の辻から南にこのカギ型を七カ所設け人々は「七曲り」と呼んだ。北部では堤町までの間一ヶ所だけである。城下を貫く街道筋はすべて商人町としたのも防御上の理由による。一部名称を変えた街道筋の町々は、大半は空襲を免れたのだが古い町並みのいたるところマンションが;立ち並び日々に変わりゆく。

城下の境・河原町の木戸があった付近（右が針生屋跡・左横田公之が主の歯科医院）

平成九年二月十日小川は突然針生の「癌の末期、余命数ヶ月」を知る。この日から二人の最後の71日間が始まる。針生は生涯独身であった。異変を知らせてきたのは彼の妹だった。「仙台で最期を迎えさせたい」切願された小川はためらうことなく宮城野病院にかけつける。外科の石川誠、内科村田輝紀、泌尿器科安達国昭、事務長直町嘉幸とじっかい生が4人勤務する同病院のほかに針生を委ねるところがあろうか。

東京で脳の腫瘍摘出手術を受けた針生は三月二日仙台に移り同病院に入る。病名を知らない彼には術後の静養というふれこみであった。が、一ヶ月もたたぬうちに自力歩行が困難になる。さすがに病状に疑念をもちしきりに聞きだそうとする。「どうしても聞いて欲しいことがある」とすがりつくように話していたのもつかのま意識の混濁がはじまるとあとはみるみるまに「最終幕」へと進んでいった。四月二十二日夜八時、針生正男は57年の生涯を閉じた。小川には彼が言い残そうとした言葉がなんであったのか心残りとなった。

河原町の西南端広瀬川のほとりに下河原五軒茶屋と称された五軒の茶屋があった。かつて江戸参勤の藩主が休み旅人もまたここで別盃を交わすのが習いであった。茶屋は明治以降一軒また一軒姿を消し、さいごまで残っていた「対橋楼」が昭和から平成に移るころ時代の終焉に添うかのように解体された。旅人が道中の無事を祈願した「旅立明神」は広瀬橋を挟んだ下流部にいまもある。この河原一帯は藩政時代いくたびも襲った飢饉の犠牲者が数十万と葬られ桃源院や松原観音はその供養に建立された。五軒茶屋跡そばに広瀬川を望む小公園がある。するどい鳴声に空を見上げると北を指して飛ぶ白鳥の群れがあった。いつになく寒かったこの冬のせいか北帰行が遅れているようだ。公園の桜並木のつぼみも小さくことしの花見は遅くなりそうだ。

さきに発った「旅人」たちに思いをはせ別盃を重ねた。名残は尽きぬが、ここらで盃を伏せるとしょう。

針生の「業績」については小川が仙台一高同窓会々報第46号（平成10年）に詳述している。ご覧あれ。